

米国フロリダにて開催された動物園動物および 野生動物関連獣医師会合同大会

浅川 満彦

1. テロ直後の渡米決断

2001年9月11日午後2時頃、当時滞在していた London Zoo 動物病院のシアター(手術室)でのこと。米国のジェット機が大きなビルに突っ込み、多くの人々が死んだという。ペーカーストリート駅で購入した *Evening Standard* 紙の一面にも TERROR WAR ON THE USA とあった。「アサカワ、今、アメリカに行くことは賢明なことではないわ」。童顔のスペイン人女性獣医師が心から心配して、そうコメントした。

9月18日から、フロリダ州で開催される動物園動物および野生動物関連獣医師会5団体、すなわち American Association of Zoo Veterinarians (AAZV), American Association of Wildlife Veterinarians (AAWV), Association of Reptilian and Amphibian Veterinarians (ARAV), National Association of Zoo and Wildlife

Veterinarians (NAZWV), American Zoo and Aquarium Association (AZA) Nutrition Advisory Group の合同大会出席は、英国留學生活のエンディングを飾るイベントとして、約半年前から参加準備をしていた。しかし、このような個人的都合とは裏腹に、状況は日に日に悪化。英国から米国への旅客便も欠航。つい先日まで、温暖化防止策である京都会議議決を踏みにじった米国を徹底的に攻撃していたマスコミの論調はまったく無くなり、米国の同盟国としての英国の立場を鮮明にしはじめた。確実に戦争になる。誰に眼にもそう写った。

しかし、次の週には旅客便は通常にもどり、大会も、予定通り実施されることになった。妻の「警戒体制は、もっとも厳重になっているはず。だから、今が一番、安全」の一言で、フロリダ行きは決定された。

2. 大会場について

米国南東部のフロリダ州のおもな産業は、オレンジやグレープフルーツなどの柑橘類をはじめとする亜熱帯果実栽培と観光業で、ディズニーワールドのあるオランダ市は、そのような観光地域の一つである。そして、今回の合同大会場も、その一角、ディズニー・コロラドスプリングスとアニマル・キングダム(写真1)で開催された。

アニマル・キングダムは1998年4月に開園し、200ha以上の敷地を持つディズニーワールド最大のテーマパークである。園内はアフリカ・ゾーン(写真2)、アジア・ゾーン、恐竜ゾーンなどに分かれ、サファリパーク形式で備え付けの船やトラックなどで観察させる。中でも興味深かったのは、裏方を順序良く観客に見せるツアーがあり、座席が外向きの列車に乗せられて、屋外にあるゾウの柵場や治療スペース(写真3)などを見せる方法は、映画「ジュラシック・

Mitsuhiko ASAKAWA: 酪農学園大学獣医学部寄生虫学教室(野生動物学) (〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582)



2000年秋から1年間、英国 Royal Vet と London Zoo に研究留学。FMD(口蹄疫)に阻まれながらも、野生動物医学マスター・コースの受講生達に混じり、野生動物の寄生虫診断の研究を実施。帰国して、ホッとすする間も無く、北海道宮島沼の野生マガンからマレック病変を検出。その対応に追われながら、半泣き状態でこの原稿を作成。写真右は、あのデビッド・アッテンボロー(ただし蠟人形): ロンドン・マダムタッソーの蠟人形館にて



写真1 アニマル・キングダム正面玄関。写真左に AAZV 2001 合同大会の横断幕。その手前の半旗に注目



写真2 アニマル・キングダム、アフリカ・ゾーンの一つ

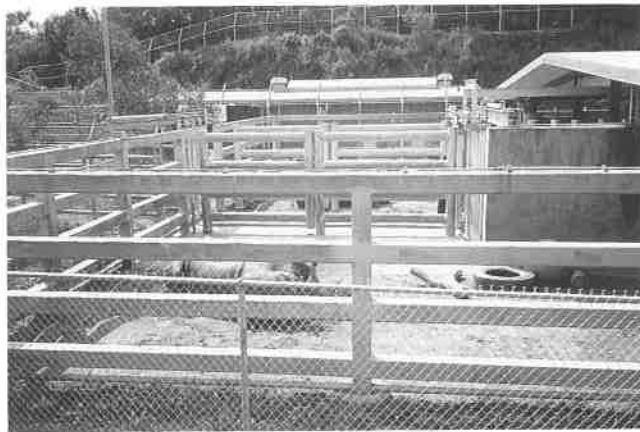


写真3 アニマル・キングダム、屋外治療スペース

パーク]のシーンを彷彿とさせた。学会参加者は特別に、動物病院の手術室(写真4、5)や飼育室内部などのバックヤード・ツアー、鳥類のフライング・ショーなどがあった(写真6)。特に、手術室の一面はガラス張りで、観客が覗く



写真4 アニマル・キングダム、手術室前にあった獣医師の役屋を示す展示



写真5 学会大会で特別に用意されたアニマル・キングダムのバックヤード・ツアーで手術室に入る参加者。室内は写真厳禁。室外の一般客用のガラス窓から撮影する



写真6 フライング・ショー。アニマル・キングダム、アジア・ゾーンの一角にて。ハクトウワシが舞台に出てきたところ。どよめきが起こり、多くのカメラのシャッターが鳴った瞬間である。米国の象徴であるこの種の登場は、戦争直前のこの時期、愛国心を高める演出となったようだ

ことができる仕組みであった(写真5)。

なお、アニマル・キングダムの詳細は Fischer(2001) など

表1 2001年両生爬虫類獣医師会 ARAV 大会における領域別の題目一覧

解剖学

カメ類における甲羅下静脈の臨床的応用, ムカシトカゲの解剖学的研究, 爬虫類の脳の解剖学

生理・薬理学

バリニシキヘビにおける Azithromycin の薬物動態, 爬虫類の体温調節のモニタリング, アオウミガメの腹腔圧, ナミヘビ類 *Elaphe guttata* への単一経口巨丸剤によるメトロニダゾールの薬物動態, Fluoroquinolone の理解, カロリナハコガメの気管チューブ挿管時における Rocuronium の適用, リクガメ類における尿酸過剰血症への Allopurinol 投与の効能, 幼体グリーンイグアナのサルモネラ症に対する無毒サルモネラ菌ワクチン投与の効果, サルモネラ菌除去グリーンイグアナ-Enrofloxacin を用いたモデル, 脊椎動物間におけるカルシウム代謝の比較, 爬虫類医のための燐に関する総説

病理学

南フロリダ沿岸で発見された多発神経障害を伴ったアカウミガメの病理所見, リクガメ・ヘルペスウイルスによる口吻部の炎症, 飼育下のインドニシキヘビで発生した慢性気管支炎・肺炎および血栓塞栓症, ヌマナムシにおける慢性肉芽腫, アガマ類 *Physignathus cocincinus* の播種性黄色腫症, イグアナ類 *Pogona vitticeps* のコロニーで発生した落屑性乳頭腫, グリーンイグアナの骨髄炎, 爬虫類におけるリンパ腫-特に口部における病変に着目して, カエル類におけるクラミジアあるいはリケッチア様感染症, イグアナ類 *Pogona vitticeps* の歯周膜炎に起因した肝血栓症他の病理学的性状, ケープオオトカゲの播種性リンパ腫, イグアナ類 *Pogona vitticeps* の高血糖症を伴った肝細胞性癌腫, E.Elkan 博士記念講演: 爬虫類の病気・過去・現在・未来

寄生虫(病)学

爬虫類のマダニ類駆除, ニシキヘビ *Python boeleni* の舌虫症治療, イグアナ類 *Pogona vitticeps* の全身性微孢子虫 (Microspora) 症, 両生爬虫類の宿主-寄生体関係, トッケイオオヤモリにおける舌虫症, 日本におけるペットカメ類の寄生線虫類-臨床および生態学的視点

微生物学・疫学

封入体病 (inclusion body disease) に罹患したボアからのウイルス分離, 英国産カメ類の新興ウイルス症, 両生爬虫類の外来性疾病 (exotic disease), アカウミガメにおける疾病の疫学的解析, テキサスリクガメにおけるマイコプラズマ感染の疫学, フランスとモロッコにおけるリクガメ類におけるマイコプラズマとヘルペスウイルスの感染状況, ルイジアナ州南東部地域におけるカメ類の東部馬脳炎ウイルスの感染状況, 毒性学パイパーにおけるフェンベンダゾール中毒

繁殖学

ガラバゴス産リクガメ *Geochelone nigra* の動物園内繁殖, リクガメ類 *Testudo* spp. の卵巣静止, ホウセキカナヘビの卵巣嚢腫

内科学

カメ類のコンピュータ画像診断, グリーンイグアナの腎不全, コモドドラゴンの白内障, キングコブラにおける白血病の化学療法, ヒョウガエルの栄養性による二次的上皮小体機能亢進症, 爬虫類の皮膚真菌 (*Nannizziopsis vriesii*) 症, リクガメ類 *Testudo* spp. における腎機能-特に冬眠直後の尿酸過剰血症, 高カリウム血症および無尿症の安定化と脱水, ボアコンストリクターにおける抗体反応性の測定, インドニシキヘビにおけるリンパ肉腫の異常病態, 爬虫類における膀胱結石, 爬虫類の肝性脂質代謝異常, アガマ類 *Physignathus cocincinus* の難治性高血糖症, イグアナ類の軟部組織における石灰化を伴う無貧血性の赤血球再生反応, 爬虫類の代謝性骨疾患, 若齢アルダブラゾウガメ個体の腸炎

外科学

毒蛇の毒腺切除術, 爬虫類と両生類のレーザー治療, 両生・爬虫類における疼痛管理, カメレオンの側頭腺-その疾病と治療,

飼養学

東アフリカ産ナイルワニの研究, 両生類幼体のための水質, アシナシイモリ類の飼育と獣医学

生態学

生態系のモニタリング指標としての両生類

倫理・法学ほか

爬虫類医学における法的および倫理的側面, 爬虫類医の心構え-何をすべき・すべきでないか

を参照されたい。

3. 爬虫類・両生類獣医師会 ARAV の内容

事前応募している名簿では, ARAV だけでは 190 名以上の登録があり, 米国のみならず, 欧州や豪州, 東南アジアなどからの参加もあった。当日参加者では, 合同大会全参加者は, 少なくとも 500 名以上であったはずである(メモを

失ったので正確ではない)。

さて, 大会の内容であるが, 合同大会の形式を取っているので共催で行われた特別講演もあったが, 一般講演はそれぞれの団体で実施された。私は, 英国滞在中, 爬虫類医学で大変御世話になった F.L.Frye 教授(カリフォルニア大学デービス校)の御計らいで, ARAV の大会にて発表する機会を得た(写真 7)。なお, 日本人の発表はこれが初めて



写真7 大会場内に設置されたブースにおける ARAV の展示

とのことで、非常に緊張した。しかし、私にとって両生類や爬虫類の獣医学的研究に接する機会が少ないので、とても貴重な機会となった。その団体の一般講演あるいはミニ・シンポジウム、AAZV とのジョイント・セッションなど合計 69 題目 (Innis ら, 2001) を分野ごとにまとめた (表 1)。この表で分かるように、薬理学、病理学、内科学、微生物学 (特にウイルス) などが充実する一方、基礎的な生理・解剖学や飼育などについても配置され、また総説的な演題は非常に勉強になった。大会事務局の C. Innis 博士らの力量が押し量られる。

すでに、柳井 (2001) あるいは霍野 (2001) などでも述べているが、日本での両生・爬虫類の獣医学あるいは獣医療領域は黎明期前である。飼育動物の多様化で、これら動物の重要性はますます高まるであろうが、現行の獣医学教育ではそういったことまで手が回らない。しかし、基本的なことは教育でカバーしないと、このような学会に出席しても理解すら難しい。私は英国の野生動物医学コース (詳しくは、Sainsbury ら, 2001) で「予習」していたので、理解が比較的容易であった (これが予備知識無しだったら、言葉のハンデイに加え苦行となったはずである)。なお、この会場でお会した同コース修了者・大平久子さん (カンザス州在住) によると、彼女が知っているだけでも十人以上の野生動物医学コース修了者がこの合同大会に参加しており、同コースの重要性が米国でも再確認された。

おわりに

AAZV のセッションには、あまり参加できなかったが (写真 8: 講演内容は Baer (2001) および Edwards ら



写真 8 ブリストル動物園・獣医師による「英国における口蹄疫発生」の講演風景。戦慄が会場を包んだ

(2001) で確認されたい], 同会の副会長である D. L. Armstrong 氏が、日本の動物園水族館の獣医師との交流を望んでいるので、窓口を紹介されたいと依頼された。帰国後、日本野生動物医学会国際交流委員会理事の宮下 実先生にお計らいいただき、ご連絡いただいた。AAZV のみならず、米国と日本の野生動物あるいは動物園動物の獣医師との今後の交流が一層盛んになることを望みたい。そして、今回の記事がこのような分野発展の一助になれば幸いである。

本稿作成に当たり、一部 2001 年度酪農学園大学獣医学部学術フロンティア事業の助成を受けた。

文 献

- 1) Baer, C.K. ed. (2001): *Proceedings. American Association of Zoo Veterinarians, American Association of Wildlife Veterinarians, Association of Reptilian and Amphibian Veterinarians, National Association of Zoo and Wildlife Veterinarians, Joint Conference, Orlando, Florida*, 411.
- 2) Edwards, M.S., Lisi, K.J. & Schlegel, M.L. et al. eds. (2001): *Proceedings of the American Zoo and Aquarium Association (AZA) Nutrition Advisory Group, Fourth Conference on Zoo and Wildlife Nutrition*, 227.
- 3) Fischer, J.K. (2001): Disney's Animal Kingdom. In *Encyclopedia of the World's Zoos*, Vols. 1-3, 362-368, Fitzroy Dearborn Publ., Chicago.
- 4) Innis, C., Willette, M.M. & Wargo, B.-M. et al. eds. (2001): *2001 Proceedings Association of Reptilian and Amphibian Veterinarians Eighth Annual Conference*, 300.
- 5) Sainsbury, A.W., Fox, M.T., 大平久子ほか (2001): 獣畜新報 54, 801-812.
- 6) 霍野晋吉 (2001): 獣畜新報 54, 910-912.
- 7) 柳井徳磨 (2001): 獣畜新報 54, 761-766.